

人工世界論

従来の創造論との相違について 従来の創造論 - インテリジェントデザイナー論や創造科学と呼ばれるものは、土台を主に宗教 - キリスト教の創世記を支援するためのものであり、純科学的発想から生じたものではなかった。それに対して人工世界論は宗教を土台とせず、あくまで純科学的、純理性的な判断として、この世界が創造された世界なのか、そうではないのか、という疑問に答えるものである。従って人工世界論は宗教と何の関係もないことを予め強調しておく。この理論を個々人の宗教心とどう和解させるかは、人それぞれであり、その方法と結果は全く自由である。

従来の代表的方法論は調整論と進化論否定であろう。物理定数が調整されている、偶然だけでは生物は複雑な進化を遂げない、などである。しかし人工世界論ではこのような方法は取らない。つまり偶然からは意味のある物理定数や複雑な諸器官は生じない - 全くの偶然からこれらが自然発生するのは不可解である、従って知的な創造主が存在する、という論法は、無限後退を生むことになる - そうゆう論法が可能なら、世界をまるごと創れるほどの知的生命体が全くの偶然から自然発生するというのはおかしい、従って創造主の創造主が存在する、世界をまるごと創れる知的生命体を創れる知的生命体が全くの偶然から自然から発生するのはおかしい、従って創造主の創造主の創造主が存在する、と永遠に続けることができる。従ってこのような論法は全く無意味である。この世界が創造された世界なのか、そうでないのかを判断するためには、この世に人工性があるかないか、という命題を純理性的に探求しなければならない。基底現実ならば人工性は一切なく、自然性だけから出来ているはずである。人工世界論はこのような観点から世界を判断していく理論である。

神の存在証明 科学知識に乏しい者でも、この世界がある種の物理法則によって動いていることに疑いを挟む者はいないだろう。もしその物理法則の中に人工物が混じっていたら、人工世界だと疑わざるを得ない。

数学者、科学者によれば、自然な論理は +、-、×、÷、= の五つで、二乗して - 1 になる虚数 i は物理的に存在せず、純粋に数学上の存在である、ということになっている(例えば imaginary number 即ち想像上の数、という名が与えられている)。従ってこの世を統べる物理方程式の一つ、量子力学におけるシュレディンガー方程式、

$$i \frac{\partial}{\partial t} \Psi = H \Psi$$

において、虚数 i が出てくるということは、この世界の始まり以前に数学を完成させた知的生命体が存在し、世界建設の際に虚数 i を使ったということになる。例えば木のうろ

に住んでいて、床を削っていたところ、鉄筋コンクリートがいきなり出てきたら、常識ある人間だったら木は自然の産物ではなく、人間が造ったものだと判断するだろう、それと同じである。

因果律を整理して言うと、原初知的生命体の誕生 数学の発展、虚数 i の登場 人工世界建設の際に使用 シュレディンガー方程式 人工世界内部に人間という知的生命体が登場 人間が数学を発展させ、虚数 i が登場 人間がシュレディンガー方程式を認識 人間が虚数 i に気付く 因果律を遡って推論 原初知的生命体の認識 神の証明その 1。

以下に言う神の証明は極めて確実で直感的である、意識を用いた思考実験

意識質感の不可解性による証明。単純明快に言って、色質感や音質感、触系質感の数が非常に多いのに、クォークを基礎とする物理界は基礎物質の種類があまりに少なく、質感と対応関係が全然結べないというのはおかしい。例えば音質感だけで何万種もあるのに、原子は 100 あまりしかないというのは不可解。脳の外では光の波長と色が、空気の振動波形と音質感が対応関係を結んでいるのに、いざ脳の中に存在しているはずの意識質感と様々なアトム的存在との間に対応関係が全然ないというのは不可解にすぎる - 例えばある原子がある色を、ある電磁波がある音質を - と対応関係を結んでいくと、いたるところに意識質感が散らばっていることになり、人間の意識質感を担当する確率は極めて低くなる。これはおかしいので、人工世界説を採用し、意識質感は物理存在と全く別の存在だと考えるのが合理的。従ってこの世界は人工物になるから、創造主の証明になる 神の証明その 2。

質感死について - もしこの世界が基底現実だったら、生物の主観は因果律さえ保持すればよいのであり、質感的連続性など必要ないはずである。例えば毎日の睡眠で意識が消失する = 質感が消える = 無 という過程を経て、一旦純粹無になってから、その次に覚醒によって生じる意識質感は元の意識質感である必要は全くなく、別の意識質感でよいはずである。だから朝を起きてこの意識は自分だと思っけていても、実は他の質感であり、主観的に昨日の自分とは全然別の物理的実体ということになり、自我の連続性は保持されない、つまり睡眠して質感が消えるまでしか意識の連続性はなく、人間の真の体感寿命は一日になる。仮に何らかの理由で睡眠質感死を乗り越えたとしても、数年もすれば間違いなく同じ意識質感を使っていない状態になる、というのも、肉体の新陳代謝によって人間の原子構成の形相は同じでも、質料は入れ替わっているから、以前と同じ質感を未だ使っているはずはなく、主観の連続性は保持されない。従って意識質感は不動の非物質的実体でなければならない、この世では物理学に出てくる物質的実体以外認められないから、意識質感という不動の非物質的実体だけ中に浮いてしまう。これはおかしいので、因果律界と質感界に直接的な繋がりがなくても合理的に説明できる世界観 即ち人工世界論が証明され、創造主としての神が証明される 神の証明その 3。

アニメとか見たことがないと言われると困るのだが - 意識には特殊な質感があり、例え

ば声優が発するいかにも美少女な声質とか、いかにも美少年な声質というものがある。これらは単純に言って物理的実体であり、それ以外の何物でもないはず。人間の子供が生じたのは進化論に従えばここ3万年以内である。しかしまさかそういう特殊な質感が物理的実体として都合よく人間の進化に合わせて宇宙に生じるということは常識に反するから、元々宇宙にそういう質感が物理的実体として存在し、それを後から利用したということになる(人間の肉体、脳は宇宙にすでにあったものを利用して再構成したものにすぎないから、当然脳に依存する意識質感も同様の原理に束縛されることになる)。ということは、人間の子供が発生する以前にいかにも美少女な質感とか、いかにも美少年な質感とかが宇宙にあったことになり、人間発生以前に人間らしさの方が物理的実体としてすでにあったことになってしまう。これは因果律が逆転しており、宇宙の進化に反する。そう考えるよりも、この世界は無限時間が経過した後の世界であり、そういう特殊な質感は人工的に創られたものだと考えるのが自然である 神の証明その4。

現代人と一万年前の人類種は遺伝子構成にほとんど差異がない、ということは一万年前の人類種も現代人全く同じ質感空間を所有していた、ということになる。そうすると原始人の質感空間にアニメ声質感が設定されていたということになる。アニメ声質感は極めて芸術的な存在であり、無条件な質感属性として文明的な人格性(キャラクター性)を所持している(例えばアニメ声質感をランダムにキャラクターへ設定すると、いかにも不自然な印象を与えることになる)。原始人にそのような代物が設定されているということは、文明的なものを質感空間においてだけ先取りしていたということになってしまう。文明発生以前に文明的なものが設定されている、というのは因果律の矛盾だから、この世界は基底現実ではなく、人工世界だと考えた方がより合理的である 神の証明5。

次の証明も明快である。進化論に従えば、生物は生存競争に勝つため、生存に最適な姿形をしているはずである。だから生存に適しない姿形をした動物がいれば、進化論ではなく、創造主によって因果律が捻じ曲げられて創られたということになる。それがいわゆる人間である。もし人間が進化論によってのみ進化したならば、前髪は長く伸ばせないはずである、なぜなら視界の確保は陸生動物にとって前提条件だからである。その証拠に前髪が視界を覆うほど伸ばせる動物は一種もない。当たり前である、生存に不利な視界を覆う前髪をずるずる引きずって歩く動物存在など不可解である。しかし人間だけ髪を長く伸ばせる - なぜか? デザイン上の理由から、髪を長く伸ばせた方がいいからである。まさか人類すべてが禿げか短髪というわけにもいくまい。神が介入せず、因果律にのみ従って知的生命体を生むと、髪の毛が短い知的生命体しか生まれず、アニメなどでキャラ分けが全然できなくなる(動物図鑑に動物の角を切った姿を載せることはない - 従って髪を切った原始人の姿を載せるのは不自然である、髪が足元まで伸びきった番傘お化けのような姿を人間形態の自然な姿として載せるべきである - この生命がいかにも不自然な生命であるか直感的に把握できる) 神の証明その6。

哲学的証明として - 普通に考えて、科学が発展すればいずれにせよ人工的な世界を創る

ことになる、そして一度でも人工世界が出来てしまえば、あとは無限時間ずっと人工世界が存在する世界になる。従って人工世界が存在しない基底現実世界というのはただの一回切りであるから、無限時間に対してその一回切りの世界に生まれるというのは確率的に言って不可能である。たまたま超初期の基底現実界に生まれるというのは、無限の数だけ目があるサイコロを一回だけ振っていきなり1を出すようなものである 神の証明その7。

進化論に従えば、生とは弱肉強食の闘いであり、適者生存がすべてであり、それに必要なものだけが残ることになっている。例えば目、耳、鼻は獲物を獲るためにあり、それ以外なんのためでもなく、必要なければ消滅さえするのである(例えば光のない洞窟に住む生物など目が退化してなくなってしまう)。すべて生命の形は獲物を獲るため合理的な形をしており、一切無駄なものは生じていない。これは物理法則にも当て嵌まることで、電磁気学も相対性理論も量子力学も全く無駄がない。存在論的に弱い形式のものは強い形式のものに占める空間を奪われるわけだから当然である。ということは、これらの論理はむしろ意識質感 - 学問的にいえばクオリア - にも当て嵌まるはずである。なるほど色質は獲物を捕らえるために必要だし、音は周囲環境の探知のため、嗅質、味質は獲物が食べられるか食べられないかを判断するため必要不可欠であり、これらすべては生物史において何度となく使用された意識質感であろう。当然生存の原理は意識質感にも当て嵌まるわけだから、生存に奉仕しない意識質感は設定されずに消滅してしまうはずである、数億年に渡って一度も使用されない意識質感が弱肉強食の原理のみで生じた生物に設定され続けるというのはあまりに不可解である。進化論に従えば、これは人間にも当て嵌まるわけだから、生に奉仕しない質感は一切ないはずである。合理主義者はここでまた声優を登場させざるを得ない。アニメ絵の娯楽全般で使用される声優のアニメ声質感なるものは、一度でも聴けば分かることだが、100%生存と無関係であり、地球の歴史46億年に渡ってただの一度も現界しなかったはずである。100%生存と無関係な質感が46億年の間一度も使用されなかったのに、全く唐突に脳内に現界できるというのはあまりに不可解である。例えば新元素を創ることはできるが、そんな簡単にできるものではなく、科学者が集まって設備を整え何度も実験し、ようやく非常に不安定な形でかろうじて短い時間だけ新元素を生み出せるのである。にもかかわらず、何の努力も実験もなく、すさまじい安定性を以って、今まで一度も脳内に現界しなかった新質感が、唐突に発生することができるというのは不可解すぎるのである。これを合理的に説明できるのは人工世界論以外にない 神の証明8。

我々の世界は主観的に最適な速度で進行しているが、別に宇宙が質感上のそれらしさに合わせて進行速度を調整しなければならないという義務はないから、宇宙における物質が質感の最適なそれらしい速度を超えて運動したり、それらしい速度より非常に遅れて運動することが可能である。そうなれば、はや送りがもしくはコマ送りのような主観世界に住むようになる。宇宙が質感者にとって絶対的に最適な値で物質を運動させなければならないという義務はないから、何にせよ、不自然に速い感じか、遅い感じの主観世界に住むこ

とになる。しかしこの世界はそうになっていない。都合よく質感上のそれらしさが最適に展開できる速度で宇宙が進行してくれるというのはあまりに不可解であるから、この世界は質感者に合わせて意図的に宇宙の進行速度が設定されている世界 - つまり人工世界であることが証明される 神の証明9。

色質感には無条件に伴う温度感なるものがあり、赤色系は暖かく感じ、青色系は涼しく感じ、その中間に位置する緑には温感がない。これは経験的なものではなく、ア・プリアリなものである、つまり、質感者は色に対して無条件にそう感じるのである(痛みが痛みとしてでなく別のものとして感じるができないのと同じである、質感者は痛み質感が心地よいと感じることは無条件にできない)。これは存在論的なものであり、人どころか神ですら逆らえない、従って神 = 基底現実人はそういう要請に従って世界を創造せざるを得ない。火と人の血と植物と空と海は因果律的にいって全く無関係であり、並列的な関係になっていない。植物と火は何の縁もないし、人の血と空の間に何の繋がりもない、これは直感的にいって当然認められることであろう。この宇宙がわざわざ質感上の無条件なそれらしさに合わせて世界を流出させる義務はないから、空はどんな色(光の反射波長)でもよく、植物は何だっていいし、火が赤色でなければならないという要請はどこにもない。従ってもしこの宇宙が基底現実であるならば、それぞれがまるで他の存在を気遣うかのような的確な比で並び、都合よく熱い太陽や火が赤色系で、温かみのある人間の血が赤で、空と海が涼しげに青系で、植物が質感的に鬱陶しくないように緑に成るなどということは決して起こらない。当然質感者を無視してそれぞれが独自に光の波長を偶然的に設定するから、例えば空は不気味に赤黒く、海は黄色く、太陽は紫に、火は青に、植物は鬱陶しいピンクに、人間の血は気色悪く黄緑色に - という風になる。従って生まれた子供はいきなり泣き崩れることになる(雪は温感論に含まれないが、もし雪が白でない世界というものを想像すれば、どうなるかということ - 雪が積もると非常にうるさく重々しい質感印象の世界になってしまう、従って雪は白でなければならない)。しかしこの世界はそうになってない、凄まじい正確さで色質の無条件なそれらしさに合わせて光の波長が設定されるということが全くの偶然に起こるといえることはないから、これは意図的なものであり、人工世界であることが証明される 神の証明10。

質感的に自然に見える背景色の組み合わせは今現在使用されている色合いだけであり、無限時間経過しても変更されることはない。質感的に自然に見える知的生命体の姿は人間形態しか存在せず、無限時間経過しても変更されることはない(脳容量は顔面に傾斜がつかないよう最適な値になっている - 例えばアニメ絵は顎と額が平行でなければ成立しない - もしこれより少なかったり多かったりすれば顔面に傾斜がつき、質感的にいかにも気色悪い人相になってしまう)。ということは、背景色と人間形態は無限時間後でも同じ形態を採るといえることになる。となれば当然今ある形態は無限時間後と全く同じ形態ということになる。無限時間後と同じ形態になっているということは、必然的にすでに今が無限時間後であるという推論を導く。従って今は無限時間後であり、無限の科学的発展を遂げた後の

世界 - 人工世界であることが証明される 神の証明 1 1。神の存在証明終了

永遠の命について 死による肉体の消滅に対して霊や魂の不滅を説くことは、各宗教の本源的課題であろう。死後の状態を有として取り扱うためには、肉体に全く依存しないものとして霊や魂なる概念を発案、提供せざるを得ないわけだ。その存在は目に見えないし、直接感じられるわけではないから、信仰心なるものが必要になってくる。唯心論的立場に立って死後の状態があると解釈するか、唯物論的立場に立って死後の状態はないと解釈するか、という二つの選択肢に対する個人的志向によって親宗教派と反宗教派に分かれることになる。大まかに言えば、これらが今までの通例的な二大世界観であった。しかし新たな世界観 - 人工世界論では、精神と物質とを分けず、それを因果律界として統合的に扱い、意識の存在を対立的に分離し、質感界として独立に扱うことになる。質感界がまるで霊という概念に一致するかのように肉体に依存しないことは、新陳代謝によって肉体、脳の質料部分に入れ替わっても、意識質感(クオリア)は入れ替わらない、という主要点と、加齢による老いによって脳が衰退し、記憶力や判断力が低下していくのと違って、脳に完全依存の状態にあるはずの質感空間に対しては老いによる欠落がなぜか全く発生しない、という補足点から、明らかに意識質感が肉体、脳に完全依存していないことが事実として浮かび上がってくる。では質感界は何に依存しているのか - という当然の問いに対しては、単純に、基底現実の存在性に依存している、という答えが理性的判断によって導き出される。質感一つ一つを取り上げて、赤は何であるか、紫は何であるか、と問われれば、それは粒子もしくは空間であるという答えが常識的な直感によって導き出されるであろう、間違っても、クオリアは生物である、という答えは発生しない(クオリアはそれ以上遡及できない純粋点であるから)。従って人工世界論においては、理性的判断によって己のクオリアを基底現実の無機質的な存在物(粒子、空間)として解釈し、それを人工世界内の有機的な生物脳に接続しているだけなのだ、とすれば、新陳代謝による入れ替え問題に対して合理的な解答を提供できることになる。当然これが意味しているのは、人間の死によって人工世界内の肉体が消滅しても、人工世界と質感空間との接続が断たれるだけで、基底現実の無機質的存在物(クオリア)は消滅せずに残留するということである。ということは、我々は肉体が滅んでも、その核である意識質感は滅ばないということであり(点は生物学的な循環系に属さないから)、それは要するに我々が宗教を介してのみ認識していた死後の世界の存在性を合理的に容認するということである。従って人工世界論は[永遠の命]をすべての質感者に約束する。人工世界論の普及は古代からの究極的課題である死の問題を完全に拭い去ることになるであろう。

哲学の基礎論

哲学を展開する際にその理論的基礎、公理命題として原理を指定する場合、二通りの選択肢 - 即ち世界の根底に知性的存在者が存在するか、それとも知性的存在者は存在しない

かによって一個の哲学全体の様相が全く違うものになってしまう。従って哲学者はまずこの問題に真摯に取り組まなければならない・・・倫理論においてだけでなく、認識論、存在論、原理論、世界論、人間論、現象論、国家論、宗教論すべてにおいて知性的存在者の在る無しは徹底的に影響を与えざるを得ない。真摯な哲学者ならば前提としてどちらを選ぶのかはっきり言明しなければならない・・・即ち有神論か無神論か。　　だが人工世界論においては、この命題を二元論的にただちに判断できないのである、というのも、科学的な神の証明は靈的な神の存在を完全否定することになるからである。神の存在証明をしているのだからと、ただちに有神論とは言えないのである。一般に倫理や徳の究極の基礎として神という概念が提出されるわけであるが、これは反唯物論的な考えであり、唯物論を否定することで倫理や徳の有意義性の証明を得ようとしている。つまり彼らの言い分はこうだ - 一切が物質的なものであるならば、徳や精神、倫理現象全般も究極的に物質現象に還元されてしまい、倫理的意義なるものは脳作用としての夢想的思い込み - 電氣的、化学的作用と何ら変わりなくなってしまう。だから非物質的なものが要求される、そしてその究極形態として靈的知性者なるものが果敢に要求されるのだ、と。人工世界論において、確かに神の存在証明を果たしたが、それは結局のところ科学及び唯物論の亜種であり、靈的知性者の存在を否定している - 宗教と科学は対立するものとして一般で受け入れられているが、これが多少なりとも真理を含んでいるとするなら、人工世界論は科学的創造主の存在を証明したことによって、靈的な神の不存在証明を果たしたことになり、神の存在証明 = 人工世界論は究極の無神論であるという判決が原理的宗教家 - 異端審問官から下されることになる。つまり哲学的立場から深く洞察すれば、人工世界論は有神論であると同時に無神論ということになるのである。哲学者としての私は神に関してこのような結論に至ったわけだ。前提論、公理命題論を明快な形で決着をつけて始めて、哲学が開始できるのである。これを怠った歴代の哲学者は数多い。私は哲学の基礎をしっかりと固めて出発出来たものと自負している。これから展開される私の哲学が今後どうなるか予測はつかないが - 砂上の楼閣とならぬため常に概念ではなく、世界内に現にあるもののみを哲学の対象として選んでいくことになるだろう。そしてそれは極めて有意義な哲学的意味論を永遠に後世に対して残すことが可能になるであろう。物理学はいずれ近い将来終焉を迎える、社会学、経済学、人類学も人間という限界を相手にしている限り、学問発達の終焉は必ず来る。机上数学の展開は無限のように見えるが、順列性という束縛自体が構成論理なわけだから、無限進化は望めないであろう。しかし哲学は何らかの終焉を迎えることができるだろうか？　否、断じて否である。我々は永遠に哲学しなければならない、物理学や数学は人工知性でも可能なのだ - 哲学することこそが人間であることの証である以上、哲学は即ち永遠の学である。そして哲学者は - 即ち悠久の人間像そのものである。

富樫

2006年7月25日

私は私の全未来に対してこう予言しておこうと思う - 偶然が一切だったと後世に言われ
ないために。意志こそが世界を形成するのだという理想主義を永遠に・・・。

【私の予測では、近いうちに、私はかつて人類に課せられた要求の中でも最も困難な要
求を人類に突きつけなければならなくなる】 ニーチェ

森田氏から上記の記述に関して補足説明してほしいとのことであった。なぜ科学的な神
の存在証明は霊的な神の不存在証明になるのか？という疑問が私に提出された。哲学的な
回答を以下に記そうと思う。まず論理的にいて、不存在証明なるものは出来ないとい
ことを強調しておこう。宗教家等が唯物論者に対して、霊的な神を否定するならば、霊
的な神が存在しないことを証明せよ、などと言ってくる場合があるが、証明というのは何か
具体的な証拠を示してなされるもの - つまり何らかの存在を示すことによって存在性を証
明することだから、無いことの証明は原理的に不可能である。従って厳密に言えば、科学
的な神の存在証明を行ったからといって、霊的な神の不存在証明に成功したことにはなら
ない。しかし少なくとも科学的な神の存在証明はこの世界の創造主が霊的な神ではないこ
を示すことができる。存在における中立性を支持しないならば、創造主は科学的かつ霊
的である、ということにはならず、創造主は科学的か霊的かいずれかである、というこ
になり、創造主が人工世界論によって科学的であることが証明されれば、創造主が霊的
ではないことが証明される。神において非中立原理が成立するかどうかというのは難しい問
題であるが、常識的観点から、科学的かつ霊的という概念は自己矛盾を含んでいると判断
する - というのも、霊的という概念は非唯物論的という意味合いが強く、唯物論的な科学
思想とは融合し得ないからである。従って神は唯物論的存在者か、非唯物論的(霊的)存在者
かのいずれかである、という非中立の哲学命題が成立可能である。人工世界論においては、
神は唯物論的存在者である、という見解を支持する。そしてそれが証明されたならば、非
中立原理として、神は非唯物論的(霊的)存在者である、という命題は否定されることになり、
という見解を支持する。これが霊的な神の不存在証明である。

人工世界論においてはキリスト教的創造論は一切採用しない。霊的作用なる不定義な力
を原因とするのは単なる素朴な想像にすぎず、全く存在論的意味合いを持っていない。無
理やり定義するなら、化学的、物理的作用、数学的構造をもたない力となるであろう、し
かしこのような力を存在として認めるわけにはいかない。合理的規則として数学以外は何
も認められないというのが我々の世界一般に通用することであり、我々の生活における一
切は数学的構造をもち、物理的作用のあるもののみである。宗教を皮肉るならば、彼らの
祈禱や信仰は脳内の化学的、物理的作用にすぎないし、聖書は紙とインクで出来ているか
ら物理的構造をもっている。つまり彼ら宗教家達は物理法則と数学的構造の上に胡坐をか
いて、霊的作用うんぬんと叫んでいるわけだ。このようなわけのわからぬ存在力が創造論
に接合され、不合理の汚名を創造論は受けてきた。従って我々は創造論から一切の霊的作

用なるものは取り除かなければならない。人工世界論においては靈的作用うんぬんは一切認められない。創造主は数学と物理学のみで世界を創造したというのが人工世界論の明快な立場である。

森田氏からさらに多数の質問をいただいたので、それに答えようと思う。神において中立性を支持しないという説は前提にすぎないのではないかという質問が出たが、無論神は包括的な存在者であることは言うまでもないことであるから、極めて中立的な存在だと言えなくもない。しかし靈的という概念と科学的という概念は全く反対なことを意味しているので、このようなはっきりと反体性を有しているような概念対立においては、厳格な意味合いではないが、排中律のようなものが適用できると思う。靈的というのは非唯物論的という意味であり、科学的というのは唯物論的ということであるから、SはAであると同時に非Aであることはできない、という排中律を適用して、神は唯物論的であると同時に非唯物論的であることはできない、という結論を支持できると思う。従って神の非中立原理は前提から出発しているのではなく、概念相互の対立から出発しているのであるから、仮説的なものにすぎないのではないかという見解は受け入れがたい。第二の質問は、神は動機や意志を持っているならば、非唯物論的ではないかという意見であるが、意志、思考作用一般は脳における化学作用、物理作用にすぎない論 - 人間機械論を人工世界論では採用するので、神が意志、思考をもっていたとしても、唯物論的作用から免れることはない。第三の質問は神が意識をもっているのかどうかということであるが、人工世界論は世界から人工物を探し当てるといふ論なので、そのようなことには答えられない。例えば人間の創った仮想環境内のキャラクターにとって我々の世界が何であるか分からないのと同じく、我々は基底現実が何であるか分からない。基底現実に関しては一切不明である。第四の質問は意識質感が物理的実体でないならば、それは靈的実体ではないかという質問だが、人工世界論においては、クオリアは数学的構造をもつと考えるので、数学的実体であると解釈している。しかしこれを証明するのは非常に難しいので、靈的実体(物理的作用、数学的構造をもたない実体)ではないと断言できるわけではない。

更なる質問五、森田氏の『「唯物論的」というと、神の存在自体を否定してしまうことになります』というのは全然分からない。なぜならこの世界は唯物論的な世界だからである。唯物論的な世界を創造しているなら、創造主も唯物論的と推測するのが当然。靈的世界なるものを創っているなら、創造主は靈的な存在者といえるが、この世界には靈的なものは全然見当たらないのだから、唯物論的世界となり、創造主も唯物論的存在者となる。靈的唯物論的世界より、唯物論的唯物論的世界、という方向の方が明らかに自然。世界に唯物論的作用しか見当たらないのに、創造主にそれと違った原理を押し付けるというのは不可解(ここで言う唯物論的というのは、靈的作用でない作用のすべて - 数学を整合性として用いる作用のすべてを指すので、世界のすべての要素が物質だと主張しているわけでは

ない。特にクオリアは明らかに非物質的実体であるし、意思や思考は物質的なものに還元できるにしても、例えば概念を物質だと言わないように、意思や思考は非物質的な存在性である。従って唯物論的 唯物論的世界、というのは厳密に言えば、広義の唯物論的 広義の唯物論的世界、もしくは、数理的 数理的世界を意味する。しかし霊的な作用を認めないという点を強調したいので、思想として唯物論的、非唯物論的と区分けされたならば、唯物論の亜種に属する思想であることを明確に宣言する)。

人工世界内においては一般物質がすべてであるのは自明だが、基底現実においてはそうではない。基底現実を構成するのは霊的な作用ではないアトム的な何か - つまりいわゆる質料因と呼ばれるものである。人工世界内の構成要素は物質であることは科学的に明らかであるが、基底現実の構成要素は我々にとっては謎であるから、単に質料因と呼ぶ他ない。物質とは別物の質料因に重きを置くことから、人工世界論は唯物論的ではあるが、いわゆる唯物論思想ではない。現実世界における質料因は三つ予想される、クオリアに用いられる質料因、基底現実を用いられる質料因、人工世界に用いられる質料因である。それぞれ、第一質料因、第二質料因、第三質料因と呼ぶことが出来る。一般の物理法則が通用するのはアリストテレス的な不加入性としての第三質量因だけである。

ホームページタイトル 人工世界論

ホームページアドレス <http://homepage2.nifty.com/sinseigingateikoku/>

ホームページにおいて哲学を展開しています、ぜひ御覧になって下さい。

善悪の最終決戦は疑問符です

善悪の最終決戦は、神の存在証明とはまったく関係のない内容であるので、別問題として扱うべきである。これはほとんど議論の余地なく間違っている。そもそもダイエット食品で進化は起きない。起きてもせいぜい栄養失調くらいのものである。なので変異体ゴブリンの大量発生というのは妄想に過ぎない。また、悪魔的な顔をしている若者がいたとして、悪魔的な顔つきをしている理由はなにかを考えてみれば、それは自己中心的な心になっているからそういう顔つきになるのである。その若者が改心し、善い行いをするようになれば、顔つきもよくなって来る。従ってこれは進化とはまったく関係のない事である。以上。